

經濟論叢

第109卷 第1号

出口勇藏教授記念號

献 辞	大野英二	
社会科学の「科学性」	河野健二	1
貨幣価値をめぐるリカードゥとマルクス	行沢健三	18
資本と分配の理論について	菱山泉	41
ルカーチとハンガリア・ソヴィエト共和国	平井俊彦	64
W. バジョットのアダム・スミス論	岸田理	85
実質費用論と機会費用論	高橋正立	108
B. B. ベルビーフレフスキー論序説	松岡保	131
晩年のマルクス覚え書	田中真晴	150

出口勇藏 教授 略歴・著作目録

昭和47年1月

京都大學經濟學會

W. バジ ョ ッ ト の ア ダ ム ・ ス ミ ス 論

岸 田 理

I

『ロンバード街』 *Lombard Street* (1873) および『イギリス憲政論』 *The English Constitution* (1867) の著者として有名なウォルター・バジ ョ ッ ト Walter Bagehot (1826-77) は、主として評論活動を通じて多方面に活躍した人であった。つまり、かれは文芸批評、社会学、政治学、経済学の領域においてその多才ぶりを発揮したのである¹⁾。

ところで、19世紀後半における経済学上の方法論争はイギリスにおいても historical reaction を惹きおこし、それに応じて幾人かの歴史派経済学者を現出せしめた。わたくしはその点を解明するため、ソロルド・ロジャーズ Thorold Rogers (1823-90) およびクリフ・レスリー Cliffe Leslie (1825-82) に引きつづいて、バジ ョ ッ ト の経済学的見解に注目してきた。これまでわたくしがバジ ョ ッ ト について公にした研究成果²⁾は、かれの著書『経済学研究』 *Economic Studies* (1880)³⁾ に含まれている特定の論文にもとづくものであり、バジ ョ ッ ト

1) バジ ョ ッ ト の生涯および著作については、拙稿「ウォルター・バジ ョ ッ ト の研究(1)」、愛知学院大学『商学研究』第11巻第1・2合併号(昭和39年3月)の第Ⅱ節(161-169ページ)を参照されたい。

なお、最近、中央公論社より「世界の名著」シリーズの1巻として、『バジ ョ ッ ト、ラスキ、マッキーヴァー』(第60巻、昭和45年)が出版された。これは政治論を中心としているが、巻頭にある辻清明氏の解説はバジ ョ ッ ト の思想を知るうえに1つの手がかりを与えている。

2) a. 前掲論文。

b. 「W. バジ ョ ッ ト の『労働移動性』の吟味」、前掲誌第13巻第2号(昭和40年12月)。

c. 「『資本移動性』に関する W. バジ ョ ッ ト の吟味について(1)(2)」、竜谷大学『経済学論集』第6巻第3号(昭和41年12月)および同誌第6巻第4号(昭和42年3月)。

d. 「古典派経済学の前提に関する W. バジ ョ ッ ト の見解について(1)」、前掲誌第9巻第1号(昭和44年7月)。

なお、この後半部分(2)は同誌第12巻第1号(昭和47年6月)に掲載予定。

3) この中に含まれている7つの論文はバジ ョ ッ ト が1875年より1876年にいたる間、1巻の書物を

が古典派経済学的前提を吟味することによって、その経済学のもつ妥当範囲を限定し、しかも、方法論争に対して彼なりの結着を与えようとした点を問題にしたものであった。

ところが、バジョットにはこの他に古典派経済学者を個別に論じた草稿が残されている。そこで本稿では、スミスに関するバジョットの所説をとりあげ、かれがスミスをどのように理解し、スミスの学説の批判・検討を通じて、いかなる評価をスミスに与えたか、という点を明らかにしてみたい。しかる後、わたくしはそれらのバジョットの見解について、最後に若干の考察を試みるつもりである。

ところで、バジョットがスミスを論じたものに3つある。1つは、『経済学研究』に収められている「アダム・スミスと現代経済学」Adam Smith and our Modern Economy という草稿であり、もう一つは、『人物研究』*Biographical Studies* (1881) に収録されている「人としてのアダム・スミス」Adam Smith as a Person⁴⁾ という人物評論であり、他の1つは、『エコノミスト』に発表された「『国富論』百周年」The Centenary of *The Wealth of Nations*⁵⁾

著わすべく準備したものであり、その中の1つ(The Postulates of English Political Economy)は *Fortnightly Review* の1876年2月号および同年5月号に分載されたが、その他は草稿にとどまった。彼の親友 Richard H. Hutton はバジョットの死後、Robert Giffen の協力を得てこれらの論文を整理・編集し、1巻の書物として公にした。

- 4) この人物評論はもとも *Fortnightly Review* の1876年11月号に発表されたものである。ここで、バジョットは結論的に「スミスは幸運にも発展せる商業段階にめぐり合い、しかも、スコットランド人特有の冷静な頭脳と抽象性を備え、イングランドで訓練され、フランスの事情に精通していた精力旺盛の人であったからこそ、この商業段階を説明するに最適の人たりえた」(Bagehot, W., *Biographical Studies*, p. 281.) と述べている。

なお、この日本語訳はすでに高島善哉編集『スミス国富論講義』の第1、2巻(昭和25年、春秋社)のなかで分載(上・下)の形で長洲一二氏によってなされている。

ついでに一言するならば、著書『人物研究』は『経済学研究』と同様、バジョットの死後、R. H. Hutton によって、バジョットが生前 *National Review* や *Fortnightly Review* に発表した政治家についての人物評論が主として集められ、1巻の書物として再び公にされたものである。

- 5) 「ロンドン経済学クラブ」The Political Economy Club of London は1876年5月31日、『国富論』出版百周年記念のため盛大な晩餐会および特別討論会を開いた。その席には政界、学界、実業界、官界から多数の代表が出席し、W. E. Gladstone が議長をつとめた。フランスからは J. B. Say の孫に当たる Léon Say (当時、大蔵大臣) が招かれた。

バジョットもこの会に出席し討論に加わったが、その直後、この会の意義を強調するため6月3日号の *The Economist* に発表したのがこの記念論文である。ここでかれが強調したことは、

という記念論文である。

本稿では、スミスの経済理論を主として扱っている第1の草稿をとりあげ、その他については関連が生じたばあい、言及することにしよう。

「アダム・スミスと現代経済学」はその内容が3つの部分にわかれている。第1はスミスが経済学者として果たした役割は何であったかという問題、第2は『国富論』が交換経済学の視点から読み直された時、いかなる内容をもつべきかという問題、第3はそれを基礎に据えてのスミスの学説の批判的検討・評価の問題が、それぞれの内容を構成している。このばあい、バジレットがかれ独得の「描写的文体」*in description his characteristic work*⁶⁾を縦横に駆使していることは言うまでもない。

バジレットは一般に古典派経済学を「実業の科学」*science of business*、あるいは「大商業の科学」*science of great commerce*として捉える立場を貫いている。したがって、スミスの学説を検討する場合にも、「交換」の視点が重要視され、彼みずから「交換」の成立要因なり条件をいっそう豊かにすることによって、スミスの学説を吟味するという方法をとっている。また、このさい、バジレットのもう1つの特徴、すなわち、心理学的アプローチが随所に試みられていることも事実である。

II

「われわれがスミスから学べべきものは『国富論』の字面からではなく、その教義のもつ精神からであり、スミスを単なる経済学者としてではなく、あらゆる物の自然的進歩を追求している間に富裕の自然的進歩を発見した人とみなさなければならない」と、いう点にあった(*The Works and Life of Walter Bagehot*, ed. by Mrs. Russell Barrington, 1915, p. 199.)

なお、上述の晩餐会における討論の様様については、T. W. Hutchison, *A Review of Economic Doctrines, 1870-1929* (1953) の冒頭部分 (pp. 1-5.) がそれをよく伝えている(邦訳、長守善他2名共訳『近代経済学説史』、昭和32年、東洋経済新報社、上巻、3-8ページ)。

- 6) ロバート・ギッフェンによれば、「バジレットの新しい考えは、かれの洞察力と描写の一般的な力の結果であり、かれの特徴的な業績は、かれが経済学とその主題を全く新しい光の中に置くような方法で描写していることである。……バジレットが経済問題を考えるようになった時、かれが特別に備えていた才能は最高の意味での描写の才であり、描写の中にかれの特徴的な仕事が生じている(筆者傍点)」と述べている(Robert Giffen, 'Bagehot as an Economist' in *Fortnightly Review*, N. S. Vol. XXVII, p. 558, April 1880.)

さて、「アダム・スミスと現代経済学」における最初の問題、つまり、スミスの果たした役割の問題からはじめよう。

バジョットによれば、スミスは富裕の自然的進歩を人間文明の自然的成長の一部とみなし、前者が人間性によっていかに影響されてきたかを常に考えていた。それが人びとをしてスミスを実際的な学者と思わしめた。なぜなら、スミスは『国富論』において、あるものを誇張したり、他のものを省略しているが、人間性のあらゆる事実、または人間生活のあらゆる事実を取扱っているように見えたからである。ところが、現代経済学者は實際を明らかにするため、事務的手段、すなわち、1度に1つずつ物事を処理するという方法をとっているため、人びとにはかれらが非实际的であるように思われたのである⁷⁾。

ここで、バジョットが言わんとしたことは、スミスの経済分析が不完全であるため、却ってその学説が実際に近い印象を人びとに与え、その反対に、現代の経済学者の分析が経済学の主題にのみ限られているため、その抽象的分析の結果が実際から離れる印象を人びとに与えた、ということであった。いいかえれば、経済学が高度化すればするほど、その成果が一般の人びとにはますます理解されない、と述べているのである。

とも角、このような奇妙な立場がスミスを有用ならしめ、結果的に2つの役割をかれに果たさせることになった、とバジョットは考える。1つは経済学が抽象科学となるための道を準備したこと、他の1つはスミスが偉大な実践運動の創始者となった点である。まず、前者については、『国富論』の根底にある人間性の概念が現代経済学で用いられる「仮想の人間」the fictitious man に近く、現代経済学の「哲学的・意識的接近方法」the philosophical and conscious approximation⁸⁾はスミスの粗くて曖昧な考えをたえず純粋化することによって形づくられた。この意味において、スミスはリカードッや「精密経済

7) Bagehot, W., *Economic Studies*, pp. 125-127.

8) この用語はもともグリフ・レスリーによって用いられたと考えられるが、人間を経済人と仮定し、「富に対する欲望」という観点から一切の経済理論を演繹する方法のことを言い、リカードッや J. S. ミルの経済学がそれに相当する。

学」accurate Political Economy の真の親となっている⁹⁾。

また、後者の点については、スミスのそのような人間性についての部分概念が、スミスの考えそのままと受けとられるほどに人間性の全体的な真実に近い概念でもあった。スミスはある程度の推論に従うことができる人間ならば誰もが好むやり方で、しかも、实际的な人びとが興味をもつ事柄について書いたのである。自由貿易論がその良い例であるが、当時は保護貿易主義が支配的であり、そのなかで、スミスは大衆をなすほどと思わせる説得的な調子で自由貿易論を説いたのである。しかし、それはあくまでも経済学があらゆるものの発展の不可分の部分とみなされたうえでの見解であり、必ずしも経済学固有の問題としてとらえられていたわけではなかった。そのため、自由貿易そのものの完全な実現がスミスにとって実際は悲観的であったにもかかわらず¹⁰⁾、かれはコブデンや反穀物法同盟の真の親となっている¹¹⁾。

バジレットはこのようにスミスの果たした2つの役割を考察したが、それはまた、スミスの著述そのものが「半具体的」semi-concrete¹²⁾であったことによるものと考えた。

III

それでは、第2の問題、つまり、「交換」一般がいかなるばあい成立するか、という問題に移ろう。

バジレットは、『国富論』が現代経済学の書物とみなされるならば、それについて次の4つの質問がなされるべきだと考える。

(1) ある財貨を他の財貨の多少と交換させる原因は何か。

9) Bagehot, W., *op. cit.*, p. 127, p. 129.

10) バジレットは『国富論』第4編第2章の箇所〔岩波文庫、大内訳(、78-79ページ)〕、すなわちスミスが「イギリスにおいて通商の自由の全面的復活を期待することは、ユートピアの設立を期待することに等しい……」と述べている箇所を引用して、スミスが他の誰よりも自由貿易主義がイギリスの政策の基本的学説であると受けとられるようにした教師であるという考えは、スミスにとって奇妙なものであったろう、と述べている (*Ibid.*, p. 129.)。

11) *Ibid.*, pp. 127-129.

12) Cf., *ibid.*, p. 129.

(2) これらの財貨を生産するばあい、その原因はいかなる法則のもとで作用するか。この問いに対する解答が人口法則と資本成長の法則を与える。

(3) これらの財貨が多くの人びとの協力によって生産されるならば、それらの財貨または売上高における人びとの分け前を決定するものは何か。この問いに対する答えが分配法則を与える。

(4) もし、この協力が他のすべての協力のように何らかの費用を要するならば、誰がその費用を支払い、いかにしてそれが徴収されるべきか。この問いに対する答えが課税の理論である¹³⁾。

バジョットによって与えられたこれら4つの質問は、経済理論の叙述が交換から始まって、生産・分配・課税にいたる筋道を明らかにしたものであり、したがって、『国富論』そのものが交換の理論として読みとられねばならないことを教えている。しかし、バジョットはかれの論文において、これらの質問のすべてに答えず、主として第1の質問をとりあげ、関連するかぎりにおいて、第2の質問に接近している。おそらく彼の意識のなかには、あるべき理論としてのスミス『国富論』がいかにそれらの質問と密接にかかわり、その点を解明することがとりもなおさず現代経済学の性格を明確ならしめることであるという認識があったのであろう。以下、その点を跡づけてみよう。

バジョットはまず単純な場合の物々交換を想定する。しかも、それが成立するためには、6つの要素が必要であると考ええる。最初の2つは交換される2つの財貨の量であり、残りの4つは交換者それぞれが抱く2つの感情である。2つの感情とは、交換者のいずれもが相手の財貨に対してもつ切望の程度と、自分の財貨に対してもつ好悪の感情である。このような交換が成立するための6つの要素は、たとえ貨幣が介在する取引においても本質的に変わることはない。なぜなら、貨幣は確かに望ましいものであり、利点の多いものであるが、交換の本質を説明するために必要な要素を何ら新しくつけ加えるものではないからである¹⁴⁾。

13) *Ibid.*, p. 131.

14) *Ibid.*, pp. 132-135.

バジレットはこのように交換が物的な財貨量（貨幣を含む）と交換者の心理状態との関係から成立することを明らかにしたが、後に述べるように、その財貨量そのものも窮極的には、生産者の思惑ないしは心理によって左右されると考えたのである。いずれにしても、かれの説明の仕方が心理学的であり、具体的叙述の箇所では、売手と買手の心理が心ゆくばかり描写されている。このことは彼の実業界における活動から推して当然のごとであらうが、それは理論と實際をできるだけ一致させようとするバジレットの研究方法の1つの現われであり、かれ独自の描写的手法はそれの表現に最も適した方法であった。

とも角、以上の説明によって、バジレットは「交換」を十分に説明できたと考えたか。いや、そうではなかった。かれによれば、以上の交換学説は2つの財貨の相対量に依存している。しかし、ほとんどの財貨は人間労働によって随意に増大させられうる。人間はこれらの財貨量を自己の満足する程度にもたらし手段をもっている。そのため、財貨量そのものは交換における窮極的原因とはなりえない。交換の問題を終らせるためには、人間がいつ好むものを供給しはじめ、いつその供給をやめるかが明らかにされねばならない¹⁵⁾、と。

バジレットはここで純粹に交換の問題から離れて、生産要素としての労働と資本がいかなる心理的要因にもとづいて生産に寄与するかという問題の考察に移ってゆくのである。しかし、バジレットにとって、生産の問題は広義の意味での交換の問題にすぎないのである。

上述の問いに対するバジレットの答えは次の通りである。生産者は自己の生産物と交換に何かを受けとるために生産し、その対価から受けとる利益・喜び・満足が生産という退屈さを十分に償うかぎり、生産を続行するし、そうでない場合は生産をストップする。ただし、このことは初期の社会においてそのまま当てはまるが、今日の商業社会では当てはまらない。なぜなら、後者では生産を左右するものは労働者ではなく資本家であるからである。資本家は原材料

15) *Ibid.*, pp. 145-146.

を購入するのと同じように労働を購入する。したがって、かれがそれらを購入するさいの「思惑」calculation は、事業全体にとって極めて重要な要素となる。なぜなら、かれの思惑によって事業が着手されるか否かが決定されるからである¹⁶⁾。

バジォットはこのように財貨量そのものが結局、独立生産者ないしは資本家の思惑によって定まることを明らかにした。しかし、バジォットはここで当然のことながら、これらの人びとのおかれた「産業組織」the organisation of industry の違いが財貨の生産数量を異なったものにさせる、と述べている。すなわち、古い組織では、分離した労働者、つまり、独立生産者は鳥合の衆の特徴をもつのに反し、新しい組織では、労働者は資本家の統御のもとに働き、軍隊の1員であるような特徴をもつ。したがって、後者、すなわち、資本主義的生産様式は前者、つまり、単純商品生産様式よりも生産においてより有効である、と¹⁷⁾。

しかし、バジォットはこれら新旧の産業の組織形態もある1点において共通であると考えている。それは資本家も労働者（独立生産者を含む）も人間性において変わらないという点である。この点からバジォットは労働および資本の自由移動を導きだす。すなわち、労働者も資本家もある方法を用いればあまり労働を要しないで獲得できるものを、わざわざ他の方法を用いて多くの労働を費して同じものを獲得するということは決してない。そのため、労働が職業間を自由に移動するかぎり、同一の労働によって生産される財貨はたがいに交換される。それと同じように、同一の資本でもって生産される財貨もたがいに交換される。もしそうでなければ、労働も資本もより有利なところへ向かうだろう¹⁸⁾。

このようにバジォットは人間性という観点から労働および資本の自由移動の必然性を見、さらに、それによって労働および資本がそれぞれ同一水準の賃金および利潤を志向する点を明らかにした。しかし、このさい、労働と資本の移

16) *Ibid.*, pp. 146-148.

17) *Ibid.*, p. 148.

18) *Ibid.*, p. 149.

動が新しい産業組織、すなわち、資本主義的生産様式において遙かに容易であることをバジョットは主張したが、労働と資本の移動を比較したばあい、後者の方がヨリ容易であると主張したのである。というのは、人間とは移動するのに最も厄介なもので、低給の労働者ほど妻子という重荷をにない、そのため移動したばあい、自分たちの安定を得ることは甚だ困難である。ところが、資本のばあい、文明がそれを移動させやすい仕組みを発明したからである。この仕組みの基礎は貨幣である。貨幣の効用の1つは、何ら損失なしに資本を保持できることであり、同一事業における同一資本の原則を実質的に保証し、また、資本家が事業を選択するさい、アレコレ考える時間的余裕を与えることができることである¹⁹⁾。

資本移動を容易ならしめる貨幣の役割をこのように述べた後、バジョットはさらに銀行業の機能に言及する。すなわち、資本の保持機構としての貨幣の初步的形態は、「期待」*expectation* という点において欠点をもつ。なぜなら、資本が単なる貨幣形態にあるあいだ、資本家はそれから何の利益をも引きだせないからである。ところが、銀行業が大いに発展している国では、貨幣機構は遙かに有効となる。なぜなら、資本を遊ばせている資本家は、それを銀行に預けることによって利子を得るからである。この利子は資本家にとって投資中断中の収入源となり、自己の資本にくいこむことなく、また、資本の早まった使用に赴くこともなく暮らしてゆけるものとなる。他方、銀行業者は投資の機会を待つこの資本を一般の人びとの預金とともに、もっとも有利な取引先に貸付ける。このように資本が1時的に使用される場合、それは「短期利潤」*temporary profits* を平均化させる方向にむかい、資本が投資に振り向けられる時、それは「長期利潤」*permanent profits* を平均化させる方に向かうのである²⁰⁾。

バジョットはこのように資本の合理的活用が銀行業を媒介として始めて可能

19) *Ibid.*, pp. 150-151.

20) *Ibid.*, pp. 151-153.

であることを明らかにしたが、ただし、このことは1870年代のイギリスにおいてのみ真実であると結論づけたのである。なぜなら、同一の時代において、同一の資本に対して得られる同一の収益の実現は、資本が自由に移動される職業間についてのみ真実であり、そのような状況がほとんど達成されているのは、ひとりイギリスだけであったからである²¹⁾。

以上、わたくしはバジレットの極めて描写的な交換学説をかなり忠実に跡づけてきた。そのさい、われわれは交換に関する彼の見解が基本的に人間のもつ経済的心理から展開されているのをみた。また、生産過程そのものが流通過程から演繹され、しかも、生産行為そのものが生産者の交換心理にしたがい、資本と労働が自由移動を通じて、また、銀行業の積極的役割を媒介にして、同一水準の利潤や賃金をもたらす方向に動く推移をみたのである。これらの見解によって、われわれはバジレットの経済学のとらえ方を知るとともに、かれが『国富論』を交換の角度から捉えなおし、かつ、新しい経済的事実、たとえば金融市場や証券市場に関する叙述をつけ加えることによって、かれが言うところの「現代経済学」を構成し、それをもって1870年代の商工業が大いに発展せるイギリスに適用させようとした意図を十分に知ることができたのである。

それでは次に、バジレットがこれらの描写的見解を基礎にすえて、スミスの個々の学説をいかに検討し、評価したかという問題の考察に移ろう。

IV

バジレットはスミスの学説の検討をはじめるにあたって、まず、肯定的な部分を取りあげ、それについて言及している。それはスミスの重商主義批判の部分である。バジレットによれば、「富は貨幣である」という見解がスミスの時代になお信じられていたので、スミスはその論駁に全力を用い、完全な成功を収めた。しかし、この論駁が有効であったのは、全くスミスの功績によるものではなく、スミス以前に行なわれたヒュームの「摘発」 exposure に負うと

21) *Ibid.*, p. 153.

ころもあった。ただ、ヒュームは逆説的なところがあったので、実業家に何の影響も及ぼさなかった。これに反し、スミスは重厚にして率直な方法でこの問題をとりあげ、しかも、かれが商業事情に通じてただけでなく、多くの他の教養や権威をもった人間として述べたので、かれの見解は実際的な人びとに大いに印象づけるところとなった²²⁾。

ついで、バジレットは極めて対照的な見方であるが、スミス『国富論』の全体的な性格づけをあらかじめ与えている。すなわち、バジレットによれば、スミスの理論は賢明な考えについての粗い輪郭であり、それは稀には正確に述べられているが、首尾一貫したものではない。それは正確に真実を言い当ててはいないが、しばしば真実に近いものである。それは理論の一貫性に欠けるが、その時代における偉大な知的努力の賜物である。それは扱われている主題について関心を高める目的をのぞけば、今日では不用であり、その理論的水準はすでに乗り越えられている、と²³⁾。

現代的視点からスミス『国富論』に対してこのような性格づけを行なった後バジレットはいよいよ具体的な理論の検討に移ってゆく。かれはまず、『国富論』第1編第5章のいわゆる「真実価格論」(労働価値説)をとりあげ、それを次のように批判する。すなわち、この学説は現在では真実でない。なぜなら、10基の蒸気機関に助けられた1,000人の労働は、それを持たない1,000人の労働より多くの価値を生産し、したがって、この2組の労働の成果は互いに交換されることはないからである。今日では、直接労働の他に、過去の労働の成果である巨大な器械装置がある。これはとうぜん支払われねばならない。でなければ、装置の所有者はそれを使おうとしないであろう²⁴⁾。

このように、バジレットはスミスの労働価値説が不変資本部分を全く欠除している点を明らかにしたが、かれはさらに進んで、同章にある冒頭部分の箇所〔岩波文庫、大内訳(-)、67-68ページ〕を引用して、スミスが投下労働量と支配労働

22) *Ibid.*, pp. 154-156.

23) *Ibid.*, pp. 156-157.

24) *Ibid.*, p. 158.

量を一致させている点を問題にしている。バジェットによれば、ある財貨が購入する労働量は、それが労働者たちによって望まれる程度に依存する。劣等な社会における1台のピアノは、1樽のビールよりもヨリ少ない労働を購入する。単なる労働は考えられる価値尺度のうち最も悪い尺度である。なぜなら、それは欲求とともに変化し、人類の好みとともに変わるからである。ある財貨が購入する日々の労働の量ほど、不確かで変りやすいものはない²⁵⁾。

バジェットはこのように投下労働量と支配労働量を一致せしめたスミスの見解を人間の欲求および嗜好の可変性という観点から全く否定したが、結局のところ、バジェットは労働価値説が未開の社会状態に妥当しえても、商工業の太に発展した国または社会では決して妥当しないことを明らかにしようとしたのである。

ついで、バジェットは『国富論』第1編第7章のうち、いわゆる「自然価格論」(生産費説)の部分を取りあげて、それが同様に曖昧な見解であることを指摘する。バジェットによれば、それは資本蓄積後の交換価値学説に当たる部分であるが、スミスはそれを苦心して作りあげていないし、また、それを第5章の交換価値学説(労働価値説)と調和させていないし、さらに、それを調和させる際に困難があることを感じていない。確かに第7章の交換価値学説は第5章の学説より真実に近いが、スミスの考えでは前者が後者に代りうるものではなかった。『国富論』の全体を通じて、3つの物、すなわち、「財貨の自然価格」と「財貨を作るに必要な労働量」と「財貨が購買する労働量」とがたえず混同され、くりかえされている。実際には、そのどれもが他のものと一致しないにもかかわらず、と²⁶⁾。

バジェットはこのように、スミスの提出した2つの交換価値学説(労働価値説と生産費説)が明白に相いれないことを明らかにしたが、さらに、バジェットは第2の交換価値学説、すなわち、スミスの「自然価格論」がいかに曖昧な見

25) *Ibid.*, p. 160.

26) *Ibid.*, p. 161.

解であるかを平均的地代の考察を通じて明らかにしている。バジヨットによれば、地代は価格を構成しない。もし構成するとするならば、いかなる農場の地代が価格を構成するのか。穀物栽培用のあらゆる区劃の地代は種々マチマチである。価格の中に半分をしめる地代が最も高い地代なのか、それとも最も安い地代なのか。いかなる種類の土地で穀物が栽培されようとも、農産物価格は変わらない。その価格は良い土地、普通の土地、あるいは、悪い土地の地代を支払っているのか。スミスはこの質問に答えていない²⁷⁾。

バジヨットはこのように、平均的地代が価格を構成するという場合の矛盾を実際的な観点から指摘している。それでは、農場の地代はどうして支払われるのか。答えはこうである。特別に良い土地の地代はそれが産みだすところの特別な量もしくは特別に良い品質でもって支払われる。すなわち、特別な肥沃さが特別な地代を償うのである²⁸⁾。

これはいわゆるリカードの差額地代論であるが、バジヨットはそれをよりどころにして、スミスの「価格構成要素としての平均地代」論を否定し、農業資本といえども地代を支払わず、普通の利潤をもたすだけであることを明らかにした。かくて、スミスの自然価格論、すなわち、生産費説はバジヨットにとって不完全な見解をしめすものであった。

それでは、スミスのこのような地代論がなぜ生まれたのか。バジヨットはそれについて次のように考察している。すなわち、それはスミスの農業に関する独得な意見と密接に関連しているところに原因がある、と。スミスは農業が1国の資本と労働が振りむけられるのに最も有利な用途であると考えた。これは重農主義学派の理論修正である。スミスはその学派の「理屈っぽい背理」argumentative absurdity に反感をいだきながらも、それに影響を受けたのである。スミスは農業が唯一の利潤の源泉であるとは考えなかったが、それが特に実を結ぶ産業であると考えた。その見解が良く現われているのは、『国富論』

27) *Ibid.*, pp. 163-164.

28) *Ibid.*, pp. 164-166.

第2編第5章「資本の種々の用途について」における農業資本に関する叙述部分〔同上(一), 160-161ページ〕である²⁹⁾。

スミスによるこのような農業重視の考え方がいかに不合理であるかを、バジョットはかなり説得的な調子で反論しているが、ここでは行論の都合上、それを注記しておこう³⁰⁾。

とも角、以上のように、スミスの「自然価格論」そのものが問題を含んでいるとすれば、とうぜん、同じ第7章の「市場価格論」そのものにも問題があるとバジョットは考えた。とくに問題は「有効需要」とかかわる部面〔同上(一), 115-116ページ〕においてであった。バジョットによれば、財貨が売られるばあいの実際価格は、単にその財貨の平均価格を喜んで支払おうとする人びとの需要によってだけではなく、その財貨に値段をつけるすべての人びとの需要によっても規定される。それは前節で明らかにされたように、市場に存在する財貨量とその所有者たちの願望が、市場に存在する貨幣量とその所有者たちの願望と比較されることによって定まる交換なのである。つまり、それは相対的量と相対的感情によって決定される物々交換の1事例である。また、「有効需要」という言葉も、スミスが定義しているように、費用価格を喜んで支払おうとする人びとの需要を意味するものならば、誤解に導くものである。なぜなら、費用価格を喜んで支払おうとする人びとによって提供される貨幣は、財貨が特に需要され、その結果、費用以上に高く売られる場合には不足をきたし、また反対に、財貨に対する需要がゆるんで、そのため費用以下で売られる場合は十分すぎるからである³¹⁾。

バジョットはこのように「自然価格論」とならんでスミスの「市場価格論」に含まれている問題点、すなわち、実際価格の決定や「有効需要」の理解に難

29) *Ibid.*, p. 167.

30) Cf., *ibid.*, pp. 167-169. バジョットの要旨を伝えれば、スミスは「農業は地主・資本家・労働者の3階級を養うが、製造業や取引は資本家と労働者の2階級だけを養う」と考えたり、また、「自然力は農業にのみ働き、製造業には働かない」と考えている。バジョットは前者に対し「土地の稀少性」をもって反論し、後者に対して「製造業もまた自然力の1つの適用である」と反論している。

31) *Ibid.*, pp. 170-171.

点があることを明らかにしたが、しかし、この『国富論』第1編第7章は他の節においてこれらより優れた見解が多くしめされていることを指摘している。それでは、なぜこのようなアンバランスが生じたのであろうか。バジレットによれば、問題になった第7章の冒頭部分、すなわち、自然価格および市場価格についての説明箇所は、スミスがこれらの主題について行なった独得な研究の導きの場所であるだけに、最良の見解がさしめされるべき筈の場所であった。しかし、実際はそうではなかった。その点について、バジレットは次のように考察する。それはスミスの基本的な考えが明確さを欠いていたからである。それでは、なぜ明確さを欠いたのか。それはスミスに抽象的思想についての正確さを十分にもとめない性格があったからであり、また、当時、「正確という言葉」words of precision もなければ、これらの主題を徹底的に考え抜くという刺戟もほとんどなかったからである。また、スミスがこれらの主題の抽象的な部分をそこそこに済ませたのは、かれの読者がそれに耳を傾けないだろう、と判断したからである。今日でさえ、広い範囲の人びとに読んで欲しいと願う著述家は、自己の書くものがあまり念入りなものとならないよう注意しなければならない。ましてや、18世紀は事情が確かにもっと悪かった筈である³²⁾。

このように、バジレットはスミスの理論に正確さが欠けている理由をスミスの性格と時代背景から考察したが、それにはかなり好意的な解釈も含まれていた。すなわち、バジレットには相対主義的な視点からスミスを眺めるところがあり、かれの次の評言はそれをよく伝えている。「偉大な思想について最初の提案者はそれらの思想を後世に大いに役立つよう完全な形にまとめるべし、とわれわれが期待するのは、ある地域の最初の耕作者は最良の永久道路をつくるべし、と期待するのと同じである。」³³⁾

以上、バジレットは主としてスミスの交換価値学説、つまり、「真実価格論」および「自然価格論」をとりあげ、それらを実際の交換の視点から批判した

32) *Ibid.*, pp. 171-172.

33) *Ibid.*, p. 173.

のである。しかも、これらの理論の吟味はバジヨットにとって、あくまでも前節で考察された第1の設問、すなわち、「ある財貨を他の財貨の多少と交換させる原因は何か」という問題に答える理論的部分でもあった。したがって、本節におけるバジヨットの見解は、前節における描写部分とならんで、ともに「交換」そのものを正しく理解するための相互依存的な部分をなすものであった。結局、バジヨットの「アダム・スミスと現代経済学」なる草稿は、まさしく「交換」の実体を究明するものであり、前節で紹介された第2より第4までの質問に対する答えは、この第1の質問に対する答えから容易に得られると考えられたのである³⁴⁾。

ところで、バジヨットは草稿の最後の部分でスミスの真価を認める2つの方法を提示している。その第1は、スミスが『国富論』を書いた当時、いかなる経済学が世人から認められ、それがどういう状態にあったかという点についてわれわれが明確な理解をもつこと。第2は、アダム・スミス自身をとりあげて、「彼を見抜く」read him ことである。ところで、これら2つの方法が具体的にどのような内容をもっていったかを明らかにしておこう。

まず、前者について。それはジェイムズ・ステュアートの『経済学原理』*An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy* (1767) についての理解を意味する。ステュアートは非常に多くの経済事実に親しく、また、かれ以前の経済学の著述に精通していた教養人であり、旅行家であった。また、かれは驚くべき天性の持主で、かれの時代に尊敬され、意見をもとめられた。その彼が多く外国貿易を有害と考え、望ましい外国貿易のために3つの「容易な原則」easy principles を提案したが、それは自由競争を否定し、国家の役割を強調するものであった。これがスミスの時代に支配的な権威ある学説であったが、スミスはこの学説から全くわれわれを解放したのである³⁵⁾。

ついで、後者について。『国富論』には実際面において重要な、しかも、常

34) Cf., *ibid.*, p. 172.

35) *Ibid.*, pp. 173-174.

識に満ちた観察が十分に含まれている。しかし、スミス自身おそらくこれらの優れた長所を知らず、むしろ、現在ではほとんど価値を持たなくなっているヨリ学問的部分やヨリ洗練された部分を好んだ。それはスミスが自分の随意になる手段を遙かに越え、しかも、たった1人の人間には「余りにも立派すぎる」too good 巨大な研究計画に従事したからである。その偉大な研究の過程で、スミスはその極く僅かの部分として「諸国民の富」にめぐり合い、それを取扱うのに彼の能力と好機がぴったり適合していた³⁶⁾。そこで、できあがったのが『国富論』であるが、それは思想と政策に影響をおよぼし、新しい科学、つまり、「経済学」の最初の書物となった。結局、スミスは「父のロバをさがしに出掛けて、王国を発見したサウル」³⁷⁾のように、人間文明の自然的成長をたずねもとめるうち、富に関する理論、つまり、「経済学」という王国を発見したのである。しかし、それによって得た名声はスミスが生涯の夢としていたものではなかったろう³⁸⁾。

以上、スミスに対するバジョットの2つの評価は、当時、支配的であった重商主義学説に対するスミスの理論上の批判の有効さ、ならびに、『国富論』そのものの中に含まれている多くの観察の重要性を指摘したものであった。とくに、後者の評価はスミス自身が気づかなかったにせよ、スミスが経済学において理論と実際を一致させようとした点の評価につながり、スミス以後の経済学者が得てして文筆上の仕事のみに満足し、実際の観察の意義を十分に理解しなかった点の批判にも通ずるものであった。

V

以上、わたくしはスミスに関するバジョットの見解を3つの節に分け、時に考察をつけ加えながら、それらを跡づけてきた。そこで、本節では特に問題と

36) この点については、前掲のバジョットの人物評論、「人としてのアダム・スミス」がくわしくそれを伝えている。注4)をいま一度参照されたい。

37) イスラエル初代の王、聖サウルのこと（『旧約聖書』「サムエル記」上）。

38) Bagehot, W., *op. cit.*, pp. 174-175.

思われるバジレットの見解をとりあげ、わたくし自身の見解を明らかにしておこう。

まず第1に、スミスが果たした2つの役割の問題について。バジレットはスミスを単なる経済学者として把握せず、本来的には道徳哲学者として把握している。この把握は全く正しい。しかし、バジレットによれば、このことがいつもスミスに経済学を人間文明の全体と不可分のうちに考察させることとなり、経済理論の前提としての人間性の叙述を曖昧なものに至らしめた。すなわち、スミスはある時は人間性の部分的側面を明らかにしているかと思えば、ある時は人間性の全体真実を明らかにしている、と。しかも、このような2重の叙述が結果的には、前者はリカードなどの抽象科学を、後者は実践運動としての自由貿易運動を準備するのに役立った、とバジレットは主張するのである。この見解は大いに問題を含むところである。なぜなら、『国富論』に描かれた人間は確かにバジレットの言うとおり、時には「仮想の人間」the fictitious man、つまり、「ホモ・エコノミクス」に近いものであったり、また、時には人間性の全体真実をあらわすものであったかも知れないが、それらの人間像は実はスミスの見解において統一されたものであったからである。スミスによれば、経済行為の主要動機としての人間の「利己心」は、「正義」という利他心や「公平な傍観者」としての良心に規制された利己心であって、このような「利己心」にもとづく利益の追求は、「慎慮」・「勤勉」・「節約」・「正直」・「克己」・「忍耐」などの徳を成立させるに至るのである。しかも、これらが十分に発揮されるのは自然的自由の状態においてである。経済行為におけるこのような人間がスミスの考える人間であって、単なる「ホモ・エコノミクス」ではなかった。それはいつも全体に媒介された部分であると同時に、部分に媒介された全体であるような人間像であった。したがって、スミスの果たした理論面と実践面における役割は、バジレットが展開したように、スミスが人間性について2面的な叙述を行なったという観点から説明されるべきではなく、予定調和論を媒介とする「存在するもの」と「存在すべきもの」との一致、すなわち、スミ

スにおける現実認識（理論的・歴史的認識）と政策的認識の統一性の観点から説明されるべきである。

ついで、第2の問題点として、バジョットが『国富論』を交換の理論として読みとろうとした点を取りあげよう。一般に近代経済学は資源の有効的配分をめぐって、さまざまな交換の理論モデルを組み立てる学問である。バジョットの活躍した1870年代はそのような経済学の1つの礎石となった限界効用理論が現われ始めた時期である。したがって、バジョットもおそらくジェボンズの効用理論、すなわち、*The Theory of Political Economy* (1871) に影響されたと十分に考えられるが、バジョットの交換理論はそれ以上に心理学的な性格を帯び、しかも、それが多分にかれの実業界における経験・知識から導きだされたものであった。あらゆる流通・生産過程が人間の心理によって説明される方法は、バジョット独特のものであり、必ずしもジェボンズの理論を待つまでもなかったかのようである。そこで、バジョットが『国富論』を交換の理論として読みとるかぎり、それは資本主義の現象を無矛盾的にとらえる叙述となり、スミス『国富論』のもつ積極的側面、つまり、階層としての労働者・資本家・地主の勤労、すなわち、中産者の industry が市民社会の中心に据えられているという普遍的側面が背景にしりぞき、スミス経済学がまるで「実業の科学」に転化してしまうのである。もちろん、かくあることがバジョットの意図であり、スミスの理論をも含めて古典派経済学の理論の普遍性を否定して、それがイギリスのような高度に発展した「大商業」の社会にのみ適用されることを明らかにし、もって、歴史学派の批判に答えようとしたのである。そこで、バジョットが言うところの「現代経済学」*Modern Economy* とは古典派経済学の前提の再吟味であったり、新しく生じた経済的事象、とくに金融機構のメカニズムを明らかにすることであった。このような視角にもとづいてスミスの理論が捉えられるかぎり、スミス理論のもつ普遍性は見失われ、『国富論』は単なる技術論的な経済学教科書とならねばならなかったのである。

ついで、第3の問題点として、バジョットがスミスの「真実価格論」（労働価

値説)を批判した点を取りあげよう。バジ ョットにとってまず第1の批判の論拠は、スミスの価値論における不変資本の欠除である。これは資本蓄積後に関するかぎり、全く正しい指摘である。しかし、バジ ョット自身、スミスと同様に労働価値説が初期未開の社会に適用されることを認めている³⁹⁾。しかし、バジ ョットが資本蓄積後において労働価値説の適用しない理由を次のように述べる時、すなわち、「生産における『直接労働』 immediate labour だけでなく、『生産援助のための過去労働の諸結果』 the assisting results of past labour も償われるべきである」⁴⁰⁾と主張する時、かれは自己の意図に反して、リカード的な価値論の次元で労働価値説を認めていることにはならないだろうか。しかし、利潤に関しては、スミスやリカードの次元から遙かに後退して、ナッソー・シニア Nassau W. Senior (1790-1864) の説のごとく、それを全く資本家の「制欲」 abstinence⁴¹⁾と規定しているのである。

さらに、スミスの「真実価格論」批判の第2点として、バジ ョットはスミスにおける投下労働量と支配労働量の一致の問題を実際的な観点から否定している。これは交換価値の大小が財貨に対する嗜好・欲求の程度に依存するという心理学的な観点からの批判であって、効用理論に通ずるものであるが、この批判によって明らかにされたのは、投下労働量と支配労働量の不一致だけであり、結局、どちらの価値説も否定されたことにはならない。なぜなら、支配労働量はバジ ョットの述べるような形で決定され、その対極にある投下労働量は一定と仮定されているからである。スミスにおける支配労働価値説と投下労働価値説の矛盾・混合を真に批判するためには、単なる現象面の交換の観察によってではなく、推論におけるスミスの曖昧さの指摘によって支配労働価値説を捨象するものでなければならない。

それでは、第4にバジ ョットがスミスの「自然価格論」、すなわち、生産費説を問題にした点を取りあげよう。バジ ョットはスミスが地代を価格の構成要

39) *Ibid.*, p. 161.40) *Ibid.*, p. 158.41) *Ibid.*, p. 159.

素と考えた点を批判したが、その論拠はいわゆるリカードゥの差額地代論であった。しかし、バジヨットは、財貨の交換価値が生産費に比例することを教えたのはスミスであり、生産費についての分析が不完全にもせよ、「自然価格論」は「真実価格論」よりも資本主義的現実をヨリ良く説明する交換価値論であると考えた⁴²⁾。このようなバジヨットの見解は一見したところスミスの見解と似かよっているが、本質的には違った認識であった。というのは、スミスは全く「真実価格論」(労働価値説)を放棄して「自然価格論」(生産費説)に赴いたわけではなく、価値の実体と現象の区別が十分でなかったところに論理の一貫性が失われたのであり、バジヨットはむしろ意識的に価値の実体認識を避けて、価値の現象形態、つまり価格論を経済学の中心課題に据える意図をもっていたからである。バジヨットの用語法において、「価値」と「価格」の区別が十分でないのは、それを良くしめすものであった。なるほど、バジヨットは、「自然価格論」における重農学派に影響された地代についてのスミスの見解部分を徹底的に批判しようとしたが、スミスの地代論そのものが「自然価格論」において問題とされる以前に、「真実価格論」がなぜ論理的に「自然価格論」にならなかったのか、という問題が論じられるべきであったろう。その点が解明されれば、おのずから地代論そのものもリカードゥ理論の水準を越えて、解答が与えられたであろう。しかし、価値論を全く放棄して経済現象をただ価格論の側面から眺めようとしたバジヨットにとって、そんな問題意識は望むべくもなかったのである。

以上、わたくしはバジヨットのスミスに関する見解のうち、問題と思われるものを幾つか取りあげて考察を試みた。しかし、これらの考察はできるだけスミスの見解に内在することによって行なったものである。確かに商品の価値なるものが、形而上学的観念の1つであるという考えも存在するが⁴³⁾、たとえ商品価値の認識が困難であるとしても、経済学において価値論ぬきの価格論はほ

42) Cf., *ibid.*, p. 163, p. 169.

43) Cf., Joan Robinson, *Economic Philosophy* (1962), pp. 26-46. (宮崎義一訳『経済学の考え方』, 昭和41年, 岩波書店, 43-74ページ参照)。

んらい考えられないものである。経済学が全く経験科学として取扱われ、高次の価値判断(政策的認識)から切り離されて、ただ所与の目的達成のための手段を選択という低次の価値判断(財貨の排列順序を定める選択理論)を通じて見つけだすというのは⁴⁴⁾、社会科学の一環としての経済学のあり方を窮極的に否定するものである。というのは、本来の経済学は客観的存在の現実認識(理論的・歴史的認識)と、それとのかかわり合いのうちに形成される主体的価値判断(政策的認識)をともに明らかにすべき学問だからである。スミスにおいて統一されていたこれらの認識が歴史的現実によって一度否定されたからといって、それぞれの認識が相互無関係に存在すべきであるという理由は成り立たない。今こそ、技術化し、あまりにも相対化した経済学の理論を乗り越えて、ヨリ高い地平でのスミスの立脚点に立ち帰らなければならない。残念ながら、バジョットの見解は典型とまでゆかなくとも、われわれが志向する経済学についての見解の反対側にあることは間違いないところである。

わたくしはあまりにもスミスに内在して、バジョットの否定的側面ばかりを取りあげたが、かれの見解には傾聴すべきものを多く含んでいることも事実である。たとえば、これはすでに言及した点であるが、バジョットはスミス以後の経済学において、経済学者が一般に抽象の世界にのみ赴いて現実観察をほとんど行なわない傾向のあることを指摘し、スミスが経済学者として評価される1つの所以は、「健全にして実際に重要な観察が『国富論』のなかに5ページとして含まれないところはなかった」⁴⁵⁾点にあると考えたのである。理論と実際の一致を重要視するバジョットのこの点の見解は、経済学がややもすると一方に偏しがちな傾向にあることを戒める極めて有効な発言であろう。

44) Lionel Robbins の著書, *An Essay on the Nature and Significance of Economic Science* (1932) は方法論的にその考えを体系化したものである。

わたくしは1969年より1970年のあいだ London School of Economics and Political Science に留学中、この書物を取りあげ、かなり綿密な英文のコメントを作成したことがある。くわしくは、拙稿 'A Report on Lord Robbins' *An Essay on the Nature and Significance of Economic Science* (1932) (竜谷大学『経済学論集』第10巻第3号(1970年12月))を参照されたい。

45) Bagehot, W., *op. cit.*, p. 174.

さらに、『エコノミスト』の編集においてバジョットの良き協力者であった
ロバート・ギッフェン Sir Robert Giffen (1837-1910) は、アダム・スミスを
理解することがそんなに容易でないという理由で、スミスについてのバジョッ
トの見解に疑いをさしはさんだが⁴⁶⁾、バジョットが相対主義的な観点からスミ
スの偉大さを次のように評価した点がかれのすぐれた見解をしめすものであり、
本稿の末尾をかざるにふさわしい言葉でもあろう。「彼が予期しなかった『基
準』 a standard によって彼の見解を判断したり、また、彼がその基準を設定
することを思いつかなかったという理由で彼の最良の書物を非難することほど、
偉大な著述家にとって不公平なことはない。しかも、彼がいなければ、われわ
れはその基準を想像しなかったろうし、また、その基準が欠除していることを
その書物の責にするという可能性すらわれわれには思い浮ばなかったであらう
時は、特にそうである。」⁴⁷⁾

(1971, 11, 5)

46) Robert Giffen, *op. cit.*, p. 560.

47) Bagehot, W., *op. cit.*, pp. 172-173.